

「見る」を含む学習の系統性（3）

－竹取物語「天の羽衣」－

坂東 智子

Systematicity of Learning Including “Seeing”(3) : “The Tale of the Taketori
－ Heavenly Hagoromo － ”

BANDO Tomoko

(Received September 25, 2020)

1. はじめに

本研究は、国語科における「見る」力の系統的な育成を目的とする2017年度からの継続研究の一環である。

これまでに「見る」発達の系統性を考える観点の抽出を先行研究¹⁾の知見と筆者の古典の授業に源氏絵や絵巻を取り入れた授業の開発に関する研究²⁾を手掛かりとして整理することを試みた(後掲表1、表2)。次に小中国語教科書における「絵画や写真を見る」という学習での「見る」観点到焦点を絞って考察を行った。さらに複数の文献を検討することで「見る」と「読む」のアナロジーがどのように捉えられてきたかを論じた³⁾。

「見る」と「読む」の相違点、共通点は以下の通りである。前者は対象が事物や行為。後者は文字と行為の対象が異なっている。とはいえ、「読む」にも場の雰囲気や空気を「読む」や天気を予想するなどの意味もあり、必ずしも文字だけを対象としているわけではない。実際に近年の国語教科書では「言葉で変わる写真の印象」(光村小4上)といったコラム⁴⁾が掲載されたり、「たいせつ(説明のしかたを工夫して書く)」では、「内容に合う写真をそえたり具体例をあげたりすると、読み手に分かりやすい文章になる。」(光村小4上)⁵⁾といった、言葉だけでなく、図や写真といったものを組み合わせて表現する、また理解するといったまとめがなされ「読む」対象の拡大が見られる。

この背景を考えるにあたって2006年頃に多く議論された「PISA型読解力」を思い起こしてみたい。高木辰郎(2006)⁶⁾は、PISA型「読解力」の特徴を次のように整理している。

- ① テキストに書かれた「情報の取り出し」だけでなく「理解・評価」(解釈・熟考)も含んでいること。
- ② テキストを単に「読む」だけでなく、テキストを利

用したり、テキストに基づいて自分の意見を論じたりするなどの「活用」も含んでいること。

- ③ テキストの「内容」だけでなく、構造・形式や表現法も評価すべき対象となること。

- ④ テキストには、文学的文章や説明的文章などの「連続型テキスト」だけでなく、図、グラフ、表などの「非連続型テキスト」も含んでいること。

2006年のPISA型調査以降、国語科では「非連続型テキスト」を含む多様なテキストを読む力を養うことが求められるようになった。勿論これは、「個々人は成人後の生活に関連する活動の中で多くの種類の書かれたテキストに遭遇するため、通常学校で遭遇する限られた種類のテキストを読むことができるだけでは不十分である、という原則に基づいている。」⁷⁾国語教室での学びが、学習者を取り巻く現実や社会、その中で生活と直結していることがこの点からも窺える。社会に拓かれた教育課程が求められ、また同様に1時間ごとの教科の学び、授業にも求められている。

本研究では、「非連続型テキスト」を含む多様なテキストを「読む」力は、多様なテキストを「見る」力と連動して育成される、という仮説を持っている。それは、これまでに繰り返し紹介してきた言語哲学者ヘルダーが『言語起源論』(1772)で提示した「われわれは一つの思考する共通感覚器官である」⁸⁾という命題、これを筆者は「視覚の洗練と言語形成のプロセスは表裏一体のものと考えられる」と解釈しているのであるが、その一見単純なしかし真理であると筆者が考えているものに支えられた仮説である。しかし、本稿執筆に際し改めて考えてみると、ヘルダーが提示した命題だけではなく「PISA型読解力」の議論や、これまでの筆者の絵画的要素を取り入れた古典の授業開発との関連も看過できな

いものであることが明らかになってきた。

そこで本稿では、「見る」力、「読む」力、「書く」力の関連はもちろんのこと、その中核に「考える」力の育成を据え、「考える」プロセスを生み出すための、古典の授業における絵画的資料の活用を提案する。教材は中高の共通教材として教科書に多く採録されている竹取物語「天の羽衣」を取り上げる。

国文学者の三田村雅子（2006）は、「いま改めて、なぜ源氏物語と絵画なのか」との問いに答えて、「補助教材としての絵画ではなく、絵画でなくては語れないものと文字によって語るものを行き来して、楽しみを増幅

していききたい」⁹⁾と述べている。本稿でも絵本や絵巻、また現代語訳等を、原文とは別の「もう一人の読者」の「読み」（解釈）とその「読み」に基づく「表現」として捉え、それらと対話することを通して、また書き改められた部分と原文との違いの中に、各時代の受容者とは異なる昔の人々（原文）のものの方や考え方があることに気づき、古典の読みを通して思考する力や、時代や社会文化的背景、様々な物事に対する認識力に培う授業を提案したい。

表1 「見る」対象となる「視覚テキスト」の種類と意味構成レベル¹⁰⁾

数量	種類	テキスト内容	構成意図
単独 複数 ひとまとまりの	静止画的 動画 事物 人物 自然や風景	具象的 象徴的 記号的 象徴的 複合的	構成意図をもたない 簡単な構成意図をもつ 複雑な構成意図をもつ

表2 「見る」と「見るこゝろ」レベル（試案）¹¹⁾

レベル	認識	方略	思考	言語化
I	全体をおおまかに捉える	全体を見る（おおまかに、詳細に、近づいて、遠くから、俯瞰的に）	構成要素やその関係から場面や様子内容を考える	見えるものと言葉を対応させる
II	個々の構成要素を外見から明確に認識する	部分を見る（詳しく、分析的に）	解釈する（簡単な、象徴的な意味）	意味内容を構成し言語化する
III	構成要素の意味内容を認識する	部分と部分の関係を見る	象徴や社会・芸術上の約束事を利用して解釈する	象徴性、シンボルなどを理解し言語化する
IV	構成要素の関係を認識する	方略を知っている（比較、分類、類推、推測等）	他の情報を参照して解釈する	テキストの特徴や、内容、目的と形式の関係を吟味し議論する
V	全体の内容や特徴を捉える	ふさわしい方略を選ぶ	内容、目的と形式の関係を吟味評価する	解釈の根拠を説明する
VI	自分の経験や既知のものに関連付けて認識する	目的に合わせて方略を組み合わせて用い、それを吟味評価する	受手の解釈はコードや約束事により形成されているという仕組みについて考える	ひとまとまりの視覚テキストを対象とし、意味を構築したり、解釈の根拠を挙げたりして説明する
VII	社会文化的背景や因果関係を認識する	別の文脈で得た知識を視覚的テキストの理解に適用する	社会・文化的な文脈がテキストに反映されているか考える	社会・文化的な文脈がテキストに反映されているかについて議論する
VIII	時間軸や空間軸にテキストを位置づけ認識できる		作成された文脈、受け手と発信者との相互関係を考える	時間軸や空間軸にテキストを位置づけ論じる
IX	受手の理解を形成するコードや約束事の働きを認識する		間接的に表現されちる社会・文化的価値、前提とされていることがらを分析的に考える	

2. 先行研究

小中高の古典授業に絵画的資料を用いた実践はこれまでも多数試みられている。実践報告や理論的な考察も数多い。古典教材に合わせて掲載された絵画的資料（挿絵）に関する論考もみられる。本講では、その中でも特に直接本研究と関係する次の4論考を取り上げる。

2. 1 中島和歌子（2007）

「中学校国語教科書『竹取物語』の挿絵をめぐる問題点と可能性—『竹取物語絵巻』昇天図の解釈と分類—」採録：『札幌国語研究』12、pp.25-48

平成18（2006）年度版中学校国語教科書全社の『竹取物語』挿絵の詳細な検討を行った論考である。「全体的な傾向として、以前は口絵のみにあったカラー写真が、2色刷の挿絵に代わって数多く掲載されるようになってきている。一年生の古典入門教材の『竹取物語』に関しても、江戸時代の『竹取物語絵巻』や近代日本画のカラー写真が、口絵から本編の挿絵として掲載されるようになった。（中略）このような教科書の視覚表象重視（ビジュアル化）や大型化の当否については改めて検討する必要があるが、現に掲載されている以上、その活用法も更に考えていく必要がある。」と述べる。

平成18（2006）年は、前述したように「PISA型読解力」が注目され、「非連続型テキスト」を含む多様なテキストを読む力を養うことが求められるようになった時期である。この时期的な一致と「国語教科書の視覚表象重視や大型化の当否」については、筆者も中島と同様に、機会を改めて慎重に検討する必要があると考えている。

中島はさらに、「本文解釈との関係で特に気になった【教出】の「竹取物語」の挿絵の問題を起点として、八月十五夜、月からの迎えが到来し、かぐや姫が帰って行く場面を描いた絵（以下「昇天図」と呼ぶ）の教科書での扱い方について取り上げたい。」と述べ、原文と挿絵の矛盾点に関する考察を行っている。

本研究と特に関連のある「原文と挿絵の矛盾点」（教出H18）に関する記述を次に引用する。

かぐや姫は「此国」で着ていた「衣」を自らの意志で脱いだのである。そして、天人に「天の羽衣」を着せられた途端、翁を思う気持ちを失い、ためらうことなく昇天してしまう。感情の喪失は「此衣着つる人」という呼称でも表されていた。彼女は「かぐや姫」という「此国」で与えられた名前も失ったのである。しかし残された側は、もちろん感情も記憶もそのままであり、激しい喪失感を抱かざるをえない（人間どうしの死別と全く同じである）。

女房装束は、脱ぎ置かれた「かぐや姫」としての「此国」での「衣」であり、天人が「月の都」から持ってき

た物ではない。姫君の姿のままで昇天するように描いた場合は、単に本文や解説文と合わないだけでなく、天上と地上世界との断絶や、翁らの喪失感を想像しにくくなるだろう。そこが特に問題だと思われる。

同様に、翁らを見返ってはいけないのである。かぐや姫との別れ自体辛いものだが、別れ際、彼女のほうには悲しみの感情が全くないことが、いっそう彼らを悲しませ、惑わせたはずである。

網代車も、女房装束と同様に、地上世界との断絶が無い。網代車は「此国」の乗り物である。網代車で行けるのは「此国」の中であり、そこは帝の力の及ぶ範囲である。（後略）

この中島の指摘は鋭く、示唆に富んでいる。

教科書の挿絵に描かれた、「衣」（女房装束や天の羽衣）や「車」（網代車か飛ぶ車）、いわば表層の「見えるもの」は、実は「此国（地上世界）」と「天上（月の都）」を象徴するものであるとの鋭く深い認識が示されていると筆者は捉えている。

同様に中島は、挿絵に描かれたかぐや姫の行為、「見返る」「見返らない」は、「此国」（地上世界）と「月の都」（天上）との断絶という原文の主題に直結する絵師の解釈が分かる部分だと指摘している。

本稿では、中島の挿絵を「見る」観点を参考にしつつ、他の先行研究（「『竹取物語絵巻』場面・構図比較一覧表」所収：『かぐや姫と絵巻の世界』2012）を併せて参照し、本稿としての、絵を見る「観点」を抽出する。

2. 2 上原作和・安藤徹・外山敦子編（2012）

「『竹取物語絵巻』場面・構図比較一覧表」

（所収：『かぐや姫と絵巻の世界』）武蔵野書院、pp.181-199

比較に用いられた絵巻は、以下の9作品である。

- 東京大学国文学研究室蔵『竹取物語絵巻』（東京大学本）
- 国会図書館蔵『竹取物語絵巻』（国会図書館本）
高島藩諏訪家伝来・諏訪市博物館蔵『竹取物語絵巻』（諏訪市本）
- 九曜文庫蔵『竹取物語絵巻』（九曜文庫本）
- チェスター・ビューティー・ライブラリ蔵『竹取物語絵巻』（CBL本）
- 武田祐吉氏旧蔵・國學院大學図書館蔵『竹取物語絵巻』（武田氏旧蔵本）
- 國學院大學図書館蔵『竹取物語絵巻小型絵』（小型絵）
- 正保版『竹取物語』（正保版本）
- 龍谷大学大宮図書館蔵『竹取物語』（龍谷大学本）
- 立教大学図書館蔵『竹取物語絵巻』（立教大学本）

9絵巻の中で「かぐや姫、昇天する」場面が描かれた

ものは、東京大学本、国会図書館本、諏訪市本、小型絵本、正保版本、龍谷大学本の6絵巻である。本稿では、9絵巻の場面・構図比較一覧表から、本研究に直接関係する6絵巻だけの、その中でも、直接関係する項目だけを抜き出し、新たに後掲表3を作成した。

筆者が第1に着目したのは、人物の視線である。かぐや姫の視線が地上に向いているのが5絵巻、小型本のみ地上に背を向けている。翁と姫の視線は、「袖で顔を覆っていて見えないもの」が4絵巻、諏訪本は屋上に視線を向け、小型本はかぐや姫に視線を向けている。屋上には帝から遣わされた兵士がいる。翁と姫が屋上に視線を向けている諏訪本は、月からの使者（天上の世界）に対して、帝の力（地上世界）の阻止を、翁と姫が願望していると解釈できるのではなかろうか。

また、地上世界の最高権力者である帝の使者である頭中将は、東京大学本では「簀の子に座し天人に伏す」姿

で描かれている。これは、地上世界が天上世界に敗北した姿とも捉えられる描かれ方である。

このように、それぞれの絵巻の細部が、どのように描かれているのか、描かれ方を、「見る」観点を絞って詳細に見ることによって、絵巻製作者の「竹取物語」原文解釈が透けてみえてくる。それらを手掛かりとして、本研究では絵巻の絵を原文とは別の「もう一人の読者」の「読み」（解釈）とその「読み」に基づく「表現」として捉え、絵と学習者が対話することを通して、各時代の受容者とは異なる、昔の人々（原文）のものの見方や考え方があることに気づかせたい。つまり、古典の読みを通して、思考する力や、時代や社会文化的背景が絵師の原文解釈に影響を与えていることに学習者の意識を向け、様々な物事に対する認識力に培う授業を提案する。

人物	東京大学本	国会図書館本	諏訪市本	小型本	正保版本	龍谷大学本
翁	端近・露頂 小袖・袴 袖で顔をおおい泣く	端近・露頂 小袖・袴 袖で顔をおおい泣く	端近・露頂 小袖・袴 屋上に視線	端近・侍烏帽子 直垂 姫に視線・手をおい泣く	室内・露頂 小袖・袴 袖で顔をおおい泣く	端近・立姿 頭巾・打掛 袖で顔をおおい泣く
姫	端近・白髪 小桂・袖で顔をおおい泣く	端近・白髪 小桂・袖で顔をおおい泣く	端近・白髪 小桂・袖 屋上に視線	端近・白髪 小桂 姫に視線	室内・白髪 小桂・袖で顔をおおい泣く	端近・頭巾・打掛 立姿・袖で顔をおおい泣く
かぐや姫	天衣を着て葱花輦に乗る。地上に視線	唐衣・裳のまま葱花輦に乗る。地上に視線	唐衣・裳で室内に座す。地上に視線	唐衣・裳のまま車に乗るしぐさ。地上に背を向ける	天衣を着て葱花輦に乗る。地上に視線	唐衣・裳のまま葱花輦に乗る。地上に視線
天人	雲上に5人。簀の子に1人(文と菓壺持つ)	雲上に6人	雲上に3人		雲上に4人	雲上に6人
飛車	葱花輦	葱花輦	葱花輦	雨眉車	葱花輦	葱花輦
頭中将	束帯 簀の子に座し天人に伏す	束帯 庭に立ち姫に視線				束帯 簀の子に立つ 天に視線

表3 『竹取物語絵巻』「かぐや姫、昇天する」場面・構図比較一覧表

2.3 井上泰 (2011)

教材としての絵巻(4)―古典学習の拡充に向けて―採録：教育学研究紀要(CD-ROM版)第57巻(中国四国教育学会) pp.646-651

対象学年は中学1年生。「竹取物語」での絵画テキストの活用に関する実践報告と古典学習の拡充に向けた絵画テキストの活用について提案した論考。

井上には、中学校校での古典授業における絵画的テキストの活用に関する論考が複数ある。

○使用教科書：『中学校国語I』（学校図書）

○文字テキスト：『竹取物語』、『かぐやひめ』（文・絵いもとようこ、金の星社、2008）、

○絵画テキスト：国立国会図書館蔵「竹取物語」、九曜文庫蔵「竹取物語絵巻」、チェスター・ピーティアー・ライブラリー蔵「竹取物語絵巻」、龍谷大学蔵「竹取物語」

「絵本『かぐやひめ』は一つの古典の享受のあり方を示している。絵本の読み方と自身の読み方を比較することで<古典を読む>ということについても考えていくことができる。」と述べる。この比較というアプローチの

仕方に着目し、比較するという方法を本研究でも取り入れている。

さらに、井上は「絵画テキスト独自の“語り”を読み解くことで、文字テキストを理解していく活動や学習者の読みを深化拡充する活動、また古典テキストを読むことについて考える活動を提案した。」とする。この井上の、絵画テキスト独自の“語り”という点については、本研究では少し別の、異なるアプローチの仕方を採用する。井上のいう“語り”という表現はあえて用いていない。

2. 4 井上泰（2013）

絵画の教材化 ―古典学習の拡充に向けて

採録：『国語教育研究』54巻、広島大学教育学部国語教育会、pp.11-22

現行（2013）の全社の教科書とその指導書から絵画テキストの使用目的を分析した論考である。かぐや姫が月に帰る場面の本文と、二つの絵画テキストを比較することで、『竹取物語』の“語り”をより鮮明にし、物語を読み直したり、読み深めたりすることができるかと述べている。前項でも述べたが、このテキストの“語り”という視点が、論考の前提にある井上独自のものである。文字テキストであれ、絵画テキストであれ、井上はそれぞれのテキストには、“語り”があると考えている。

これについて論考の冒頭では、次のように述べて、佐野みどり、三田村雅子、川添房江の座談会「描かれた源氏物語―復元模写を読み解く」での「いま改めて、なぜ源氏物語と絵画なのか」との問いに答えた、国文学者三田村雅子の次の言葉を引用している。

「（前略）補助教材としての絵画ではなく、絵画でなくては語れないものと文字によって語るものを行き来して、楽しみを増幅していきたいなと思います。」さらに、「絵画でなくては語れないもの」について、「おそらく『源氏物語絵巻』の制作主体の『源氏物語』への「読み」とその「読み」に基づいた「表現」であろう」。

本研究では、“語り”という表現は用いず、三田村のいう、絵画であれ翻訳であれ、それらの表現を、制作主体の「原文」に対する「読み」とその「読み」に基づいた「表現」として捉えることとする。

3. 「見る」と「読む」を連携させた思考力、認識力を育成する『竹取物語』「天の羽衣」の授業提案

3. 1 単元の概要

- ① 対象学年 高等学校1年生
- ② 単 元 「見る」と「読む」を行き来しながら「天の羽衣」を読む
- ③ 使用教科書 『新編古典B』東京書籍平成30年版
- ④ 参考資料

- ・『かぐやひめ』世界名作ファンタジー26、ポプラ社 1987
- ・対訳『竹取物語』川端康成〔現代語訳〕、ドナルド・キーン〔英訳〕、宮田雅之〔切り絵〕、講談社インターナショナル、1998
- ・『竹取物語』〔文〕江國香織、〔浮世絵版画〕立原位貫、新潮社、2008
- ・『かえるの竹取ものがたり』〔文〕俵万智〔絵〕斎藤隆夫、福音館書店、2014
- ・絵で読む日本の古典『竹取物語』〔監修〕田近洵一、ポプラ社、2012

- ⑤ 主な学習活動 教科書の本文と挿絵、絵本、現代の作家と画家による「天の羽衣」の文字テキストと絵画的資料を読み比べることにより、「天の羽衣」を着たかぐや姫の変容を捉える。
- ⑥ 使用するテキスト（以下のA～Fの6種類を使用）

(A) 教科書本文と挿絵

天人の中に、持たせたる箱あり。天の羽衣入れり。またあるは、不死の薬入れり。一人の天人言ふ、「壺なる御薬奉れ。きたなき所の物聞こし召したれば、御心地悪しからむものぞ。」とて、持て寄りたれば、いささかなめ給ひて、少し、形見とて、脱ぎ置く衣に包まむとすれば、在る天人包ませず。御衣を取り出でて着せむとす。（中略）

中将に、天人取りて伝ふ。中将取りつれば、ふと天の羽衣うち着せ奉りつれば、翁をいとほし、かないと思しつることも失せぬ。この衣着つる人は、物思ひなくなりければ、車に乗りて、百人ばかり天人具して、昇りぬ。



教科書（『新編古典B』東書、平30年版）の該当本文と挿絵は国会図書館所蔵の『竹取物語絵巻』「かぐや姫の昇天」である。

天人の言葉の「きたなき所」は地上世界のことであろう。ここで、地上世界は「きたなき所」なのかという問いが浮かぶ。また、かぐや姫は天人が「天の羽衣うち着せ奉りつれば」「物思ひなくなりければ」と書かれて

いる。「天の羽衣」は「きたなき所」とされる地上世界の穢れ（物思い）を消失させるものとして描かれている。天の羽衣を着たとたんに、「かぐや姫」は「この衣着つる人」と呼ばれ、名を奪われる。地上の人が持っていた名「かぐや姫」は、地上での名を奪われた「この衣着つる人」となり、月の世界の人となったのである。

名とは何かということを考えることを契機として、学習者は今まで知っていた「かぐや姫」の世界から『竹取物語』原文の世界へ足を踏み入れることになる。このように言葉、表現そのものに触れ、それを契機として原文『竹取物語』世界と学習者を出会わせたい。

挿絵の絵のかぐや姫は、唐衣・裳のまま葱花輦に乗り、地上に視線を向けている。これは原文とは異なる描き方である。また、翁と姫の間には頭中将が立つ。屋根の上には帝が遣わした兵士が描かれている。頭中将は言うまでもなく帝の使者であり、地上世界の最高権力者帝の存在そのものである。ここを契機として、かぐや姫と帝の関係、さらには地上世界の最高権力者と月の世界の対立構造を捉えさせたい。

(B) 『かぐやひめ』世界名作ファンタジー26、ポプラ社、1987

かぐやひめを、のせたくるまは、しづかに月にむかってのぼっていきます。

「さようなら かぐやひめ……。」

「さようなら おじいさん おばあさん。

いつまでも おげんきで……。」

かぐやひめは、ふりかえり ふりかえり

手を ふっています。

やがて、月からの つかいと かぐやひめは、十五夜のお月さまの なかに きえていきました。



この絵本は、多くの学習者がはじめて出会う『かぐや姫』であろう。保育園や幼稚園、また家庭で多くの学習者が読み聞かせてもらった、もしくは自分で読んだ最初の『かぐや姫』のお話であるという意味でこの絵本を選んだ。絵本文では、かぐやひめは、「ふりかえり ふりかえり 手を ふって」月へ帰っていく。おじいさん、おばあさんも、手をふって見送っている。「天の羽

衣」を着たとたんに、「もの思い」がなくなるお話ではない。翁や姫も、「手をふって見送」っている。原作の袖で顔をおおい泣き、悲しみにくれる二人ではない。原文とのこの違いは何を意味するのか。高校1年生は、この絵本世界をどう解釈するのか。絵本作家はなぜこのように表現したのか。それを考えてもらいたい。

(C) 対訳『竹取物語』川端康成 [現代語訳]、ドナルド・キーン [英訳]、宮田雅之 [切り絵]

中将がそれを受け取ると、同時に、その天人はふと天の羽衣を姫に着せかけたので、姫はもう、翁のことを、哀れとも悲しいとも考えないのであった。この衣を着た人は、着たが最後に一切の物思いがなくなってしまうので、姫はさっと飛車に乗って、百人ばかりの天人を引き連れて、そのまま天へ昇って行ってしまった。あとに、翁と姫はのこって、悲しみ嘆き血の涙を流して惑ったけれど、もはやどうしようもなかった。



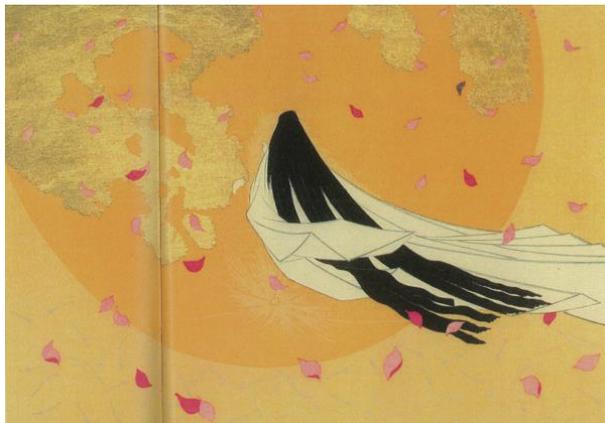
川端康成の現代語訳と、ドナルド・キーンの英訳、絵は切り絵である。川端訳では、天の羽衣を着た姫は、「着たが最後に一切の物思いがなくなってしまう」とある。地上の人から月の国の人になる瞬間を、衣を着た瞬間だと捉えている。そうした意味では、「天の羽衣」は重要なアイテムである。「天の羽衣」とはどのようなものとして描かれているか、という問いが浮かぶ。「天の羽衣」を着なければ、かぐや姫ははたして月へ帰ることが出来たであろうか、と考えたい。

残された翁と姫は、「悲しみ嘆き血の涙を流す」。

「血の涙」という表現は他の作品にはない川端独自のものである。翁と姫の悲痛な思いがこの「血の涙」を流すから読み取れよう。また、「もはやどうしようもなかった」からは、地上世界の無力を感じる。川端訳は、地上世界の無力さを強調しているとも読めるだろう。

(D) 『竹取物語』 [文] 江國香織、 [浮世絵版画] 立原位貫

この手紙と歌に、不死の薬を添え、頭中将—高野
 大國—を呼んで帝にことづけました。中将には、天人
 を介して渡しました。中将が受けると、天人はかぐ
 や姫に、すばやく羽衣を着せかけます。それで、姫の
 なかにあった翁への感謝も同情も消えてしまいました。
 この羽衣を着た人は一切の物思いから解放されてしま
 うので、姫は飛ぶ車に乗り、百人ばかりの天人を従え
 て、空に昇っていったのです。



現代作家江國香織の文章では、「感情も同情も消えて
 しまいました。」「この羽衣を着た人は一切の物思いか
 ら解放されてしまう」とある。「消える」「解放」とい
 う言葉に着目したい。「一切の物思いがなくなる」（川
 端 訳）と「一切の物思いから解放されてしまう」（江國
 訳）では、地上の穢れである「物思い」に対しての捉え
 が異なっていることに、気付かせたい。立原の浮世絵版
 画も江國訳、文章の雰囲気に合わせて、「解放」という
 言葉に同調するかのような、色づかいであり、長い髪の
 女性の感情が消えた後ろ姿だけを描いている。散る花び
 らは何を表現しているのだろうか。文章と絵を併せて味
 わい、先に述べた「表現」そのものを契機として、江國
 訳の『竹取物語』に出会い、原文との違い、また、他の
 訳との違いから、学習者に感じ考えてもらいたい。

(E) 『かえるの竹取ものがたり』 [文] 俵万智、
 [絵] 斎藤隆夫

ふたりへのおもいを、姫はこころをこめてかくので
 した。月のひとたちが「はやく、はやく」とせかすと、
 「つめたいことをいわないで」と姫はゆっくりふで
 をはこびます。そして、みかどにも手紙をかき、いつ
 までも死ななくなる不死のくすりをそえました。それ
 から、自分も不死のくすりをのみ、月のきものをまと
 うと、かぐや姫にはもう、地上のひとの心はなくなっ
 てしまいました。

かなしい気持ちもきえうせて、かぐや姫はむかえの
 車にのり、月へとかえっていきます。



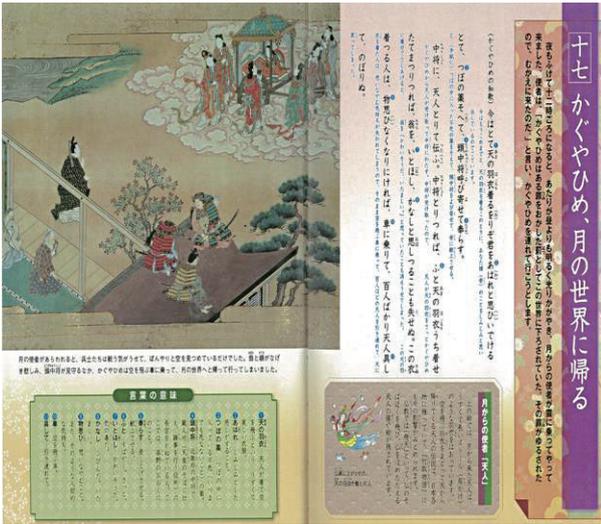
俵万智の文に斎藤隆夫の絵である。俵の文章はわかり
 やすい平易な言葉で書かれている。「天の羽衣」は「月
 のきもの」とされ、呼称を持たない。また、それをまと
 うと「地上のひとの心はなくなって」と表現される。

「物思い」ではなく、「ひとの心」はなくなるのであ
 る。それでは「地上のひとの心」とはどういったものだ
 と思うかという問いが浮かぶ。俵の文章では、そのひと
 つが「かなしい気持ち」と表現されている。「かなしい
 気持ち」だけが「地上のひとの心」だろうか。他にはど
 んな「地上のひとの心」があるだろうか、と問いかけた
 い。さらに、斎藤の絵は独特で、全ての登場人物がか
 えるとして描かれている。長く読まれ愛されてきた『竹
 取物語』の世界を、登場人物を全てかえるにすることで、
 学習者はまた違った視点から、新たに『竹取物語』世界
 に出会う仕掛けである。高校生は、この絵本をどう読む
 のか。絵と文を行き来しながら「見る」「読む」をくり
 返して、新たな作品世界と学習者を出会わせたい。

(F) 絵で読む日本の古典『竹取物語』

[監修] 田近洵一

『竹取物語』本文と現代語訳、用語解説、コラムと、
 国会図書館蔵『竹取物語絵巻』が掲載されている。中1
 の古典入門時の参考書にもなる。特にコラムを活用した
 い。コラム「月からの使者天人」では、天人と仏教との
 関係が解説されている。原作が作られた当時の人々の死
 生観が窺える。原作を時代や文化、社会的文脈に位置づ
 けて読む視点を持たせるきっかけとなるであろう。



4.2 「見る」と「読む」の連携

(1) 挿絵、絵画的資料を「よく見る」という「見方」の提案

前掲表2「見る」と「見ること」レベルの整理(試案)「認識レベル」I~V、および2章先行研究②「『竹取物語絵巻』場面・構図比較一覧表」の構図比較項目を参考に、「よく見る」ためのワークシート(例)を提案する。次に各絵画的資料の構図比較から「この違いは何だろう?」と「問い」を立てる。絵画的資料と文字テキストを対照させ、行き来しながら「読む」ことを通して、「どうしてそう思うの?」とその根拠を問う。絵本や絵巻と文字テキストを、「もう一人の読者」の

「読み」(解釈)とその表現として捉え、そこから逆に原文独自のものの見方を捉え読み深めるプロセスを提案する。

表2「認識レベル」I~Vのキーワードは、次の通り
表2「認識レベル」I~Vのキーワードは次の通りである。

I「全体」、II「個々の構成要素」、III「構成要素の意味内容」、IV「構成要素の関係」、V「全体の内容や特徴」。これと表4各絵画的資料の構図比較から「この違いは何だろう?」と「問い」を立てる。

例えば、教科書挿絵(国会図書館本)のみ頭中将がかぐや姫と翁・姫の中間に立って姫と向かいあって描かれている。認識レベルII「構成要素の意味内容」、III「構成要素の関係」について考えてみる。頭中将という人物があらわしている意味内容とは何か。

その「問い」について考えるために、教科書掲載の本文を読んでみるのである。頭中将は「帝の使い」であり「帝という存在そのもの、帝の権力」を具現しているものという意味を生成する学習者もいるであろう。そして、認識レベルIII「構成要素の関係」については、かぐや姫と頭中将の関係とは。本文から、かぐや姫が地上世界で最後に思いを寄せた人物が帝である。なぜなら、かぐや姫は、翁と姫ではなく、最後に帝に手紙と不死の薬を送ったことから推察できる。国会図書館本の絵巻では、絵師はそのように二人の関係性を捉え、その解釈(読み)をこのような形で表現しているのではないか。このように細かい問いを生成していく。

	A国会図書館本 (東書挿絵)	B『かぐやひめ』 絵本	(C) 対訳『竹 取物語』	(D) 『竹取物 語』江國	(E) 『かえる の竹取ものがた り』
翁	端近・露頂 小袖・袴 袖で顔をおおい泣く	地上に立つ 姫に視線 手を振る	描かれていない	描かれていない	描かれていない
姫	端近・白髪 小桂・袖で顔をお おい泣く	地上に立つ 姫に視線 手を振る	描かれていない	描かれていない	描かれていない
かぐや 姫	唐衣・裳のまま葱 花輦に乗る。地上 に視線	姿は描かれていな い	天衣を着て地上 に視線	天衣を着て背を 向けた後ろ姿	天衣を着て葱花 輦に乗る。視線 は前方。
天人	雲上に6人	雲上に11人	雲上に7人	描かれていない	多数
飛車	葱花輦	葱花輦	描かれていない	描かれていない	葱花輦
頭中将	東帯 庭に立ち姫に視線	描かれていない	描かれていない	描かれていない	描かれていない

表4 『竹取物語絵巻』『絵本』等の場面・構図比較一覧表

（2）文字テキストを「よく読む」という「読み方」の提案

前項では、主に絵画的資料を手掛かりに問いを生成した。本項では、さらに、教科書掲載本文を「よく読む」という「読み方」の具体的な提案を行う。

本文には、「今はとて天の羽衣着る折ぞ君をあはれと思いでける（かぐや姫から帝への歌）とて、壺の薬添へて、頭中將呼び寄せて、奉らす。中將に、天人取りて伝ふ。中將取りつれば、ふと天の羽衣うち着せ奉りつれば、翁を、いとほし、かなしと思しつことも失せぬ。この衣着つる人は、物思ひなくなりければ、車に乗りて、百人ばかり天人具して、昇りぬ。」とある。

この「中將」をどう「読む」かである。これは、繰り返しになるが、『竹取物語』の主題に迫る「深い読み」に関わってくる問いである。かぐや姫は、帝への手紙に壺の薬を添えて、天人を介して中將に渡す。中將が受け取ったので天人が「天の羽衣」をうち着せ奉るのである。「天の羽衣」をまとったかぐや姫は、「翁を、いとほし、かなしと思しつことも失せぬ。」深読みになるかもしれないが、地上の心がある最後にかぐや姫が思いを寄せていたのは、中將の向こう側にいる「帝」ということになる。そう読むと、『竹取物語』における帝とはどのような人物であったかという、新たな「問い」が生まれてくる。物語全体に関わる「問い」である。

かぐや姫の五人の貴公子、帝、翁と姫への「もの思ひ」は異なったものであったはずだ。中学生には難しい問いかもしれないが、高校生にとっては関心を持って考えられる問いであろう。この「問い」をもって、例えば、『竹取物語（全）ビギナーズクラシックス』角川ソフィア文庫¹²⁾を読むという、全文を読むという展開も可能になるだろう。

原文には「かの十五日（もち）の日、司々に仰せて、勅使、少將高野大国といふ人をさして、六衛の司合はせて二千の人を、竹取が家に遣はす。」とある。ビギナーズクラシックスの【寸評】には、「帝が竹取の邸に派遣した軍隊は、六衛府の武官二千名をもって編成した精鋭部隊であった。」¹³⁾ 帝は、地上の最高権力者として設定された人物であったのではないか。同書【寸評】には、次のような記述もある。「帝もじいさんも、万に一つも、天人に軍隊が敗れるとは思っていない。むしろ帝には、これを機会にかぐや姫が結婚問題を考え直すかもしれないという打算さえあったろう。/こうして愛する人を失う苦しみを、帝とかぐや姫とじいさんは、三人三様の立場で味わうことになった。いや、帝とじいさんとは、ともに地上的な愛に引きずられる点で変わりはない。変わったのは、かぐや姫である。/天人であるかぐや姫が、地上的な愛に悩む心をわが心としたこと、

そこに『竹取物語』の主題が浮き彫りになってくる。』¹⁴⁾

そうすると五人の貴公子とはどのような人物の象徴であったのか。求婚譚として読むという新たな読みの視点が立ち上がる。「石作の皇子」「庫持の皇子」「右大臣阿部御主人（あべのみうし）」「大納言大伴御行」「中納言石上麻呂足（いそのかみのまろたり）」の5人のエピソードを物語全体の主題、全体の構成と関わらせて読むという読みが可能になる。

『竹取物語』の話型の問題系へ学習者を接近させる契機となる。「羽衣伝説」や「天人女房」といった原かぐや姫の話があったこと。それらを踏まえながら、作者は伝奇的な要素と政治的な要素を新たに加えて、『竹取物語』を創出したのである。

ここから、不味とされる作者とはどのような人物であったのか、という問いが浮かぶ。また、なぜ、『源氏物語』総合巻で、『竹取物語』は「物語の出で来はじめの祖」と評されているのか。この紫式部の『竹取物語』に帯する評価が、現在の『竹取物語』の文学史上の評価を決定づけたことも興味深い。

このように、次々と深い「読み」に誘う「問い」が生成される。

『竹取物語』の受容の具体物である絵巻や現代語訳、絵本を、原文とは別の「もう一人の読者」の「読み」（解釈）とその「読み」に基づく「表現」として捉え、それらと対話することを通して、また書き改められた部分と原文との違いの中に、各時代の受容者とは違った昔の人々（原文）のものの見方や考え方があることに気づき、『竹取物語』の主題、時代、宗教観や政治的な影響、社会文化的な文脈に気付いていくのである。それを企図する授業の提案だと筆者は考えている。

5. おわりに

本稿では、原文や絵本の絵や本文を「よく見る」という「見方」で「見る」と同時に「よく読む」という「読み方」で「読む」を行き来し連動させながら、「よく考える」「様々な視点から物事を捉える（解釈し認識する）」プロセスを経て「見る」「読む」「考える」をそれぞれ深め、各時代の受容者と昔の人（原文）のものの見方や考え方の違いを照らし出し、古典の読みを通して、思考力、認識力に培う授業の提案を試みた。その際に、「問い」を生み出す契機として、本稿では、『竹取物語』の受容の具体物である、絵巻や現代語訳、絵本などを、原文とは別の「もう一人の読者」の「読み」（解釈）とその「読み」に基づく「表現」として捉え、それらを観点を定めて「比較する」プロセスをワークシート案の提案という形で提示した。

千年を超えて読み継がれ、愛され続けている『竹取物

語』の主題、時代、宗教観や政治的な影響、社会文化的な文脈に、学習者が気付いていく授業提案である。各時代の受容者は各々の置かれた時代、社会文化的背景の中で『竹取物語』を読み、新たなバージョンである異本としての新『竹取物語』を創り出してきた。時代時代の受容者に読み継がれ、新たなバージョンを生み出し続けてきた古典としての『竹取物語』の力を、魅力を学習者に発見してもらえたらと願う。そういった受容史というところにまで思いを至らせる、「見る」と「読む」を行き来して、考えるプロセスを生み出す古典授業の提案を行った。

本稿をまとめる中で、改めて原文や訳文の「ことば、表現そのもの」に、原作者のまた翻訳者の考えそのものが込められていることに筆者自身気付くことができた。

「見る」と「読む」を行き来する過程で、大切に読みたい、考えたい「ことば、表現そのもの」に出会ったともいえる。

言語作品の魅力に出会う、授業提案を古典であれ現代文であれ、今後も継続して行っていきたい。

<注>

- 1) 藤森裕治 (2003) 「国語科教育における映像メディアの教育内容—メディア・リテラシーの視点から—」国語科教育、53、pp.18-25。藤森裕治 (2004) 「第四の言語活動『みること』—批判力を育てるメディア・リテラシーの行方—」月刊国語教育研究、383、pp.2-3。浜本純逸 (2004) 「国語教育・国語科教育」田近洵一・井上尚美編『国語教育指導用語辞典 (第3版)』教育出版、pp.256-257。奥泉 (岩本) 香 (2004) 「メディア教育を支える「見ること (Viewing)」領域の構造と系統性：西オーストラリア洲の場合」千葉敬愛短期大学紀要、26、pp.65-96。
- 2) 坂東智子 (2014) 「教養教育における古典授業の開発 (1) —7枚の源氏絵で読む源氏物語—」『語文と教育』第28号、鳴門教育大学国語教育学会、pp.73-84。坂東智子 (2015) 「国語科教員養成課程で出会う『源氏物語』」(2) —「国宝・源氏物語絵巻柏木二」を読む—『教育学研究紀要』第60号、中国四国教育学会、pp.439-444。
- 3) 坂東智子 (2020) 「『見る』を含む学習の系統性 (2) —写真や絵画を見るときには—」『研究論叢』69巻1号、山口大学教育学部、pp.117-126。
- 4) 甲斐睦朗他 (2015) 『国語四上』光村図書、p.43。
- 5) 4) に同じ、p.47。
- 6) 高木辰郎 (2006) 「『読解力』をどうとらえるか」日本語学、明治書院、2006年6月号。
- 7) 国立教育政策研究所監訳 (2007) 『PISA2006調査

評価の枠組み』ぎょうせい。

- 8) J.G.ヘルダー (1972) 『ヘルダー言語起源論』(木村直司訳) 大修館書店。小田部胤久 (2015) 「われわれは一つの思考する／永続的な共通感覚器官である」—ヘルダーの命題をめぐるカッシーラーとメルロ＝ポンティ—、美学藝術学研究、33/34、pp.181-200。
- 9) 佐野みどり、三田村雅子、河添房江 (2006) 「描かれた源氏物語—復元模写を読み解く」所収：『描かれた源氏物語』、翰林書房、pp.8-9。
- 10) 坂東智子 (2018) 「『見る』を含む学習の系統性 (1) —絵画や写真を見るときには—」全国大学国語教育学 会大阪大会要旨集
- 11) 10) に同じ。
- 12) 角川書店編 (2001) 『ビギナーズ・クラシックス 竹取物語 (全)』角川ソフィア文庫。
- 13) 12) に同じ、p.201。
- 14) 12) に同じ、p.198。

【附記】

本稿は平成31年度科学研究費補助金 (基盤研究 (B)) (研究代表者：吉川幸男 課題番号17H02703) による研究成果の一部である。